

春江ちりめん協同組合の研究

—— 中規模工場の相対的増加と全体としての絹織物生産の減少 ——

菱 谷 政 種*

Study of Co-operative of Harue Crepe

—— relatively increase of factory of middle scale and the decrease
of production of silk fabric of this Co-operative as a whole ——

Masatane HISHITANI

The investigation of Co-operative of Harue Crepe in eleven years from 1978 to 1988 shows that middle scale of factory relatively increase, and small and large scale factory relatively decrease. Though it is a few, some of factory of large scale has such a side business as semiconductor industry.

Still more, it has been clear that the total product of this Co-operative has a tendency of severe decrease. And this reason will be due to the concentration of kind of product to the cloth of single breadth, what is called 'Kohaba'. And the cloth of single breadth is suitable to 'Kimono', therefore this Co-operative has been suffered a strong influence from 'the depression of Japanese kimono', that is 'Wasō depression'.

第1章 はしがき

福井県の織物生産高は、ここ数年において、どのような推移を示したかを表 I - 1 について見る。昭和62年は減退を示したが、平成元年には回復し、平成2年には、さらにこれを上回った。しかし、人絹織物、絹織物においては、必ずしもそうではない。人絹織物は昭和61年の水準を回復していないし、絹織物においては、昭和61年の水準を30%も下回っている。

表 I - 1 福井県織物生産高 (単位：m²)

		織物合計	絹 織 物	人絹織物	合織織物
	昭和61年	882,676	17,742	28,807	741,307
	62	823,436	15,878	23,219	692,659
	63	875,616	17,252	21,817	732,158
	平成元	888,221	15,530	23,515	747,521
	2	897,330	12,453	26,242	754,887
同 上 指 数	昭61	100.0	100.0	100.0	100.0
	62	93.3	89.5	80.6	93.4
	63	99.2	97.2	75.7	98.8
	平元	100.6	87.5	81.6	100.8
	2	101.7	70.2	91.1	101.8

資料：福井県情報統計課

*経営工学科

本研究は、このような絹織物不況を背景にして、福井県における小巾織物産地である春江ちりめん協同組合(福井県坂井郡春江町江留上 理事長 坪内琢磨氏)へ出張し、統計書(組合員台帳)を借り受けて、業者ごとの設備台数、織物生産高、原糸(生糸)消費高を調査し、実態を把握した。調査期間は、昭和53年から同63年の11年間である。これ以後の年次については、別の機会に譲ることにした。

つぎに、規模別グループごとに、業者数、設備台数、織物生産高数、生糸消費高数を集計し、規模別百分比を算出した。そして、昭和63年を同53年と対比することにより、11年間における変化の実態を把握した。

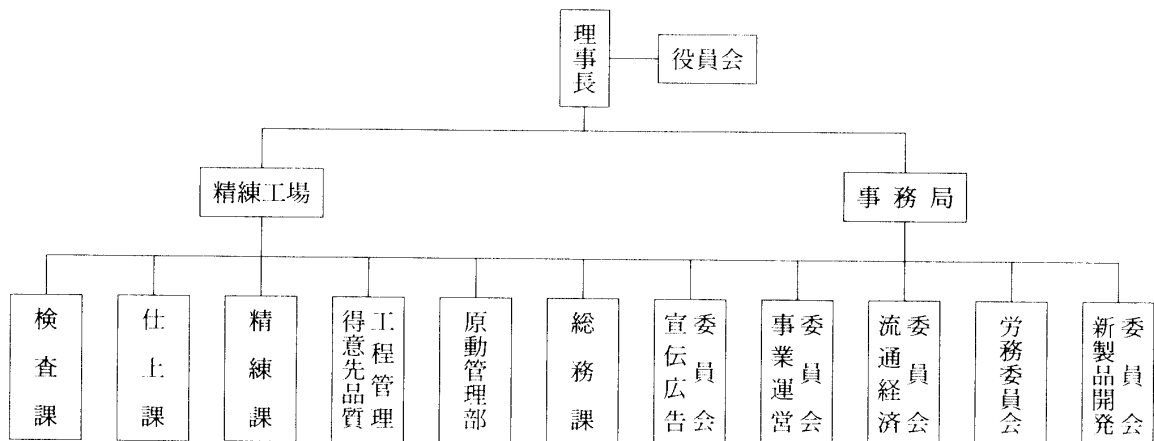
第2章 春江ちりめん協同組合の沿革

組合の資料によると、当組合は春江組合または共厚舎内地部(任意団体)として活動を続け、戦後も春江内地織物組合と名前を変えたが、生産調整、労働問題、従業員の福祉厚生対策などについて申し合わせを行ない、団結を固めてきた。

昭和53年、県の産地診断を受け、明確な法人化を課され、昭和37年9月12日、中小企業等組合法による春江内地織物協同組合に改め、組合を設立、坂井郡春江町、金津町を地区とした。昭和39年3月14日、事業協同組合として春江ちりめん精練協同組合に改組、区域も坂井郡一円として、事業内容も新たに組合員の取り扱う織物の共同精練加工を加えた。昭和39年7月20日、名称を春江ちりめん協同組合と変更し、現在に至っている。

春江ちりめん協同組合の組織図はつぎの通り。(図II-1 参照)

図II-1 春江ちりめん協同組合の組織図



第3章 組合の絹織物生産高

表III-1より、春江ちりめん協同組合(以下組合と略称)の年次別絹織物の生産高を見ることにする。この表は、昭和54年度を100とする指数を表わしている。広巾と小巾の実数を比較してみると、圧倒的に小巾の方が高い。これは組合では、小巾力織機が普及しているからである。

表Ⅲ－１ 年次別絹織物の生産高（春江ちりめん）（単位：m²）

年次	広 巾		小 巾		合 計	
	実 数	指 数	実 数	指 数	実 数	指 数
昭和53年*	33,999	186.3	791,508	97.5	825,507	99.6
54	17,324	100.0	811,590	100.0	828,914	100.0
55	9,646	55.7	652,156	80.4	661,802	79.8
56	11,595	66.9	595,144	73.3	606,739	73.2
57	17,279	99.7	574,753	70.8	592,032	71.4
58	12,506	72.2	485,857	59.9	498,363	60.1
59	33,632	194.1	553,127	68.2	586,759	70.8
60	39,715	229.2	432,825	53.3	472,540	57.0
61	13,641	78.7	353,201	43.5	366,842	44.3
62	11,992	69.2	293,936	36.2	305,928	36.9
63	11,356	65.6	314,452	38.7	325,808	39.3

（注）実態調査による。

※ 2月～12月

また、表Ⅲ－２より、広巾と小巾の生産割合を比較すると、圧倒的に小巾が多い。広巾は小巾に対して1割にも満たないことが分かる。また小巾が広巾より圧倒的に多い要因としては、当組合は小巾の産地であり、主に京都などへ多く出荷している。

第4章 規模別構造分析

前述した組合員台帳を整理して、規模別に、業者数、設備台数、織物生産高、生糸消費高を算出し（表Ⅳ－１）、さらに全体に対する構成比を算出する。（表Ⅳ－２）

第1節 業者数の規模別構成の変化

昭和53年と比較して、昭和63年において割合を高めたのは、41～60台、61～80台、81～100台、121～140台で、21～40台、101～120台、141台～は割合を低めている。とくに21～40台は減少の割合が高い。

表Ⅲ－２ 絹織物の年次別
広巾・小巾別生産割合

年次	広 巾	小 巾	合 計
昭和53年	4.1	95.9	100.0
54年	2.1	97.9	100.0
55年	1.5	98.5	100.0
56年	1.9	98.1	100.0
57年	2.9	97.1	100.0
58年	2.5	97.5	100.0
59年	5.7	94.3	100.0
60年	8.4	91.6	100.0
61年	3.7	96.3	100.0
62年	3.9	96.1	100.0
63年	3.5	96.5	100.0

（注）単位：％ 表Ⅲ－１より算出。

表IV-1 規模別変化（昭63/昭53）—実数分析—

項目 規模(台)	業 者 数		設 備 台 数		織物生産高		生糸消費高	
	昭53	昭63	昭53	昭63	昭53	昭63	昭53	昭63
1～20	11 ^件	5 ^件	147 ^台	76 ^台	71,304 ^m	27,133 ^m	1,137 ^{kg}	529 ^{kg}
21～40	14	2	453	56	189,575	17,987	4,290	342
41～60	8	5	414	250	132,833	85,486	2,653	1,560
61～80	3	3	210	208	76,493	45,623	1,700	920
81～100	1	1	82	100	22,143	34,644	432	662
101～120	3	1	325	110	106,606	46,244	1,775	804
121～140	1	1	136	128	47,240	31,676	782	714
141～	3	1	672	152	222,698	45,198	3,638	1,128
合 計	44	19	2,439	1,080	868,892	333,991	16,407	6,659

(注) 実態調査による。

表IV-2 規模別変化（昭63/昭53）—比率分析—

項目 規模(台)	業 者 数		設 備 台 数		織物生産高		生糸消費高	
	昭53	昭63	昭53	昭63	昭53	昭63	昭53	昭63
1～20	25 [%]	26 [%]	6 [%]	7 [%]	8 [%]	8 [%]	8 [%]	8 [%]
21～40	32	10	19	5	22	5	22	5
41～60	18	26	17	23	15	26	15	23
61～80	7	16	7	19	9	14	9	14
81～100	2	5	3	9	3	10	3	10
101～120	7	5	13	11	12	14	12	12
121～140	2	5	6	12	5	9	5	11
141～	7	5	26	14	26	14	26	17
合 計	100	100	100	100	100	100	100	100

(注) 表IV-1より算出

第2節 設備台数の規模別構成の変化

昭和53年と比較して、昭和63年において割合を高めたのは、41～60台、61～80台、81～100台、121～140台で、21～40台、101～120台、141台～は割合を低めている。とくに、21～40台、141台～は減少割合が高い。

第3節 織物生産高数の規模別構成の変化

昭和53年と比較して、昭和63年において割合を高めたのは、41～60台、61～80台、81～100台、

121～140台の階層で、21～40台、141台～は割合を低めている。とくに、21～40台の減り方がはげしい。

第4節 生糸消費高数の規模別構成の変化

昭和53年と比較して、昭和63年において割合を高めたのは、41～60台、61～80台、81～100台、121～140台の階層で、21～40台、141台～は割合を低めている。とくに21～40台の減り方は激しい。

第5節 まとめ

以上を要約すると、昭和53年から昭和63年の11年間に於いて、41～60台、61～80台、81～100台、121～140台は、規模構成に占める比重を高めているのに対し、21～40台、141台～は比重を低めていることがわかる。

つまり小規模(ただし1～20台を省く)大規模の階層は全体に対する比重を低めているのに対して、中規模の階層は全体に対する比重を高めているといえよう。なお大規模階層の中には、半導体などの産業に従事しているものもある。(業界新聞)

第5章 季節変動指数の算出と考察

広巾・小巾別の各年織物の生産高の合計額から平均値を算出して、平均値で各月の生産高を除いた値が、平均を100とする各月の生産高の指数となる。昭和53, 54, 55, 56, 57, 58, 59, 60, 61, 62, 63年は、それぞれグラフ化すると、図5-1, 図5-2, 図5-3, 図5-4, 図5-5, 図5-6, 図5-7, 図5-8, 図5-9, 図5-10, 図5-11となる。しかし、ここでは紙巾の関係で、図5-1と図5-1の作成の基礎となった表5-1および昭和54年より63年までの広巾・小巾別生産指数表5-2をかかげる。

さて生産が増大テンポを示す時には、図5-1のカーブは上昇傾向を示すのに反し、その逆の場合には下降傾向を示すのが普通である。つまりグラフが上昇傾向を示すか、下降傾向を示すかにより、生産が増大傾向にあるか、それとも下降傾向にあるかを推測する目安となる。またグラフが上昇傾向でもなく、下降傾向でもない時には、生産が停滞傾向にあることを示すものといえよう。

以上の見地より、グラフを整理すると、次の3種類に分類することができ、それぞれの種類に該当する年次は次のとおりである。なお、ここには生産の殆んどを占める小巾織物についてのみ分析を進めることにする。

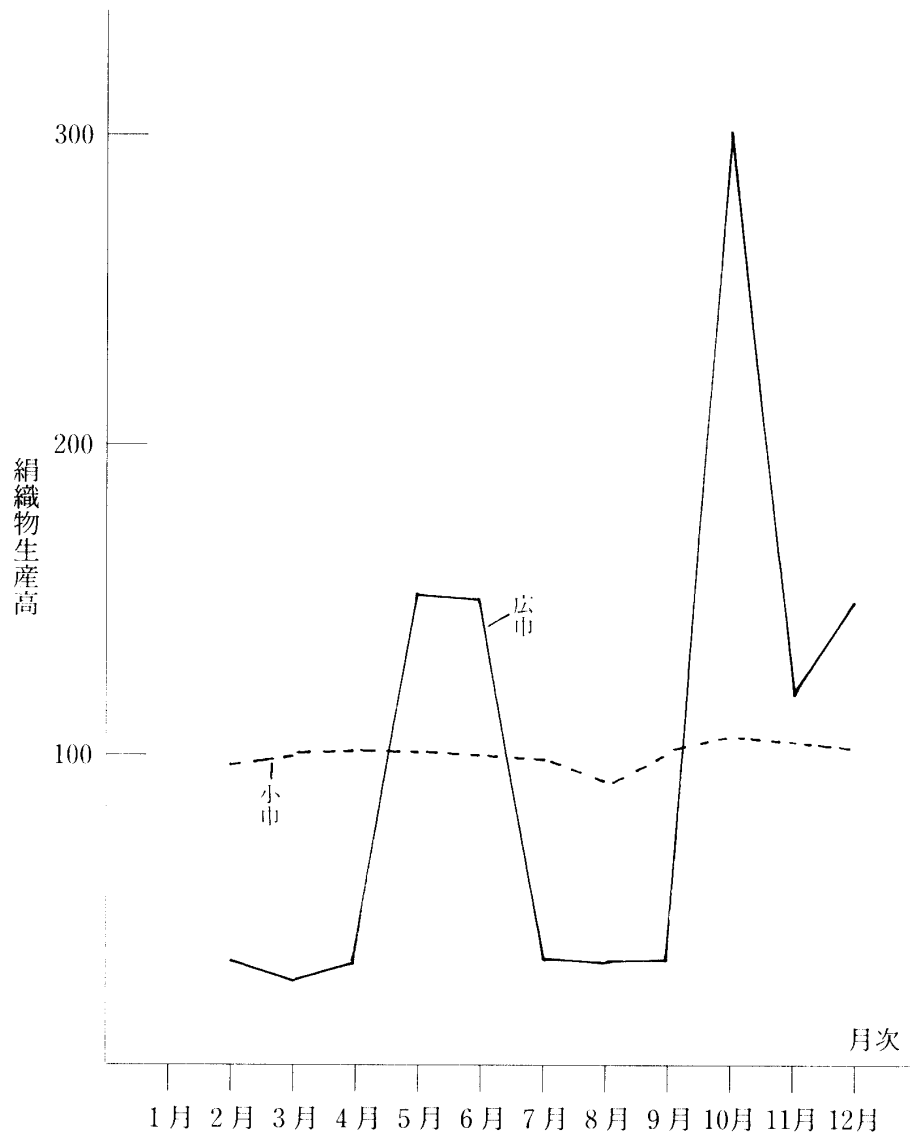


図5-1 広巾・小巾別季節別生産指数 (昭和53年)

第1節 春江ちりめん協同組合の小巾織物の生産の形態に関するグループわけと考察

以下、上昇を辿るカーブをとる年次(A)、下降を辿るカーブをとる年次(B)、上昇でもなく下降でもないカーブをとる年次(C)とすると、それに該当する年次はつぎのとおり。

(A)……昭和62年

(B)……昭和54, 55, 57, 58, 59, 61年

(C)……昭和53, 56, 60, 63年

以上より、相対的に見て、下降を辿るカーブを示す年次の多いことがわかる。これが、春江ちりめんが、昭和53年以降、全体として、生産高の下降を辿ってきた理由である。つまり、春江ちりめんは、年々生産が減退を示しながら、減退を示さない年でも、生産を維持する程度で、上昇を示す年はきわめて少なく、表Ⅲ-1に見たとおりの衰退傾向を示してきたのである。

表5-1 広巾・小巾別品種別生産実数(昭和53年)(単位:m²)

月次 品種		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計	平均
広巾	精華		375	241	428	1,860	1,824	491	483	528	2,268	1,652	3,300		
	チェニー		184	63	138	812	812	136	115	97	340	352	328		
	紋デシン		525	562	513	2,004	2,004	495	477	472	7,084	1,820	2,180		
	小計		1,084	866	1,079	4,676	4,640	1,122	1,075	1,097	9,692	3,824	4,808	33,963	3,087.5
	指数		35.1	28.0	34.9	151.4	150.3	36.3	34.8	35.5	313.9	123.8	155.7		
小巾	パレス		6,703	6,440	6,402	5,507	6,875	6,890	6,394	6,567	6,593	7,122	6,433		
	精華		41,496	47,016	47,990	48,256	47,229	45,025	44,702	48,987	48,946	49,796	47,373		
	変り織		13,853	11,040	10,080	11,212	11,281	12,633	11,246	11,839	14,712	11,381	12,653		
	エボシ		3,071	3,300	2,550	840	1,259	1,323	1,315	1,443	1,564	1,727	1,986		
	チェニー		2,967	2,319	3,301	4,711	3,155	2,594	2,505	2,835	3,019	3,439	3,436		
	羽二重		2,009	2,167	1,860	1,710	1,819	1,754	1,422	1,367	631	766	702		
	小計		70,009	72,282	72,183	72,236	71,618	70,219	65,574	73,038	75,465	74,231	72,583	789,438	71,767
	指数		97.6	100.7	100.6	100.7	99.8	97.8	91.4	101.8	105.2	103.4	101.1		
合 計			71,093	73,148	73,262	76,912	76,258	71,341	66,649	74,135	85,157	78,055	77,391	823,401	74,854
合 計 指 数			95.0	97.7	97.9	102.7	101.9	95.3	89.0	99.0	113.8	104.3	103.4		

(注) 1月は欠調

第2節 品種別に見た春江ちりめん協同組合の生産の推移

(1) 広 巾

広巾精華は11年間を通して高い実数を示している。他のチェニー、紋デシンなどの品種は、11年間を通して、また各年でも、コンスタントに生産している品種は少なくなっていることがわかる。このことから、広巾は、ニーズに合わせたものを生産し、出荷しているのではないかと予測される。また広巾は、季節的にみても、冬期では、実数、指数ともに高い値を示している。夏期では、薄着のために、布も軽目であり、お盆休みのため、生産率も大変少ない。また広巾は、月の変動が大変大きいことが観察できる。

(2) 小 巾

小巾は、昭和53年から同59年までは一定の製品をコンスタントにつくっていたが、昭和60年代に入ってから、急激に品種の数が増えてきている。しかし、品種の数は増えたが、一つの品種については、生産量は増えていない。

模様染または無地染に対しては、八掛、襦袢、紋付などに使用される精華、変り織りは、とくに小巾の大部分を占めている。小巾精華、変り織りは、春江ちりめん協同組合の生産の中心品種といえよう。

また、パレス、エボシ、柞精華、チェニー、羽二重、変りパレスなどの小巾の生産に対して、

表5-2 広巾・小巾別生産指数(昭54~63年)(春江ちりめん)

年次\項目		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
五十四年	広巾	74.6	84.2	96.1	347.9	84.7	87.3	79.7	78.9	74.5	49.8	63.3	79.6
	小巾	97.1	107.6	108.1	114.1	106.1	108.9	92.2	91.5	90.2	102.6	97.7	92.1
	計	96.5	103.2	107.9	115.3	105.7	108.5	91.9	91.2	95.9	101.5	91.9	89.7
五十五年	広巾	81.6	94.3	92.4	78.0	101.0	98.0	120.0	92.6	104.5	110.3	106.1	122.5
	小巾	105.7	118.6	114.5	111.1	101.0	95.8	95.8	85.0	92.4	94.6	92.8	93.1
	計	105.4	118.3	113.0	112.7	101.1	95.8	96.1	85.1	92.6	94.8	92.0	93.5
五十六年	広巾	91.6	96.7	105.8	82.6	72.0	81.8	102.7	93.8	111.3	129.4	112.2	120.4
	小巾	94.3	102.9	103.6	100.5	90.3	105.9	102.3	80.4	98.9	101.5	97.6	101.3
	計	96.1	104.7	105.7	102.1	91.7	105.5	104.3	82.2	101.0	103.9	99.7	103.6
五十七年	広巾	97.8	113.8	111.7	122.9	88.3	96.7	71.0	64.1	71.6	81.3	200.4	81.2
	小巾	94.9	102.1	104.5	104.5	97.3	98.0	95.0	89.6	95.0	98.2	94.2	92.1
	計	97.8	105.4	107.8	108.1	99.9	100.8	97.0	91.5	97.1	100.5	100.0	94.5
五十八年	広巾	101.9	101.9	184.7	144.4	101.1	82.5	75.1	99.6	75.7	82.8	78.2	102.1
	小巾	101.4	115.4	115.4	113.5	98.6	99.3	92.6	86.5	94.5	97.4	93.0	97.5
	計	101.4	110.6	117.1	113.5	98.6	98.9	92.1	86.8	94.0	97.0	92.7	97.6
五十九年	広巾	33.0	63.5	122.0	111.2	103.1	109.8	117.3	114.3	99.1	110.0	114.2	92.8
	小巾	95.7	102.2	105.7	102.9	109.2	105.7	102.0	97.8	96.0	96.4	91.9	94.4
	計	91.5	99.6	107.4	103.4	108.8	106.0	103.1	99.0	96.2	97.3	93.4	94.3
六十年	広巾	104.0	125.3	27.9	71.1	101.1	98.4	95.5	94.0	97.6	102.8	86.6	57.3
	小巾	94.5	105.0	97.9	108.2	102.0	102.0	107.8	91.7	101.0	101.5	99.5	87.4
	計	96.2	107.7	92.9	106.1	102.9	102.9	107.8	92.7	101.7	102.6	99.3	85.7
六十一年	広巾	117.6	110.7	79.6	82.4	87.9	94.6	156.3	91.2	89.8	90.0	95.4	105.3
	小巾	105.2	109.9	111.4	113.2	112.6	109.1	113.7	78.2	89.0	99.6	85.4	83.3
	計	105.6	110.0	110.3	112.0	111.7	108.6	115.3	78.7	89.1	89.4	85.7	84.1
六十二年	広巾	112.7	95.3	102.2	117.7	56.2	117.2	114.6	81.1	99.4	98.8	98.5	106.8
	小巾	91.9	93.2	102.3	104.2	102.0	96.9	96.9	86.8	95.8	111.2	105.8	110.2
	計	92.7	93.3	102.3	104.7	100.2	100.9	97.6	86.5	96.0	110.7	105.5	110.1
六十三年	広巾	83.0	93.9	81.5	107.2	88.3	117.1	114.5	60.9	97.6	92.8	183.7	78.9
	小巾	87.6	98.6	97.9	98.6	97.9	108.1	108.7	101.3	105.6	103.8	96.3	96.6
	計	87.4	98.5	97.3	98.9	97.6	108.5	108.9	99.9	104.7	103.4	99.3	96.0

(注) 実態調査による。

1~12月の月平均を100とする指数。昭和53年は表5-1参照のこと。

広巾の生産が不安定であるのは、春江ちりめん協同組合が小巾中心の産地であることを示すものといえよう。

第6章 結 び

以上、第1章より第5章にわたって、春江ちりめん協同組合の構造を分析してきた。以上の分析よりわかるように、春江ちりめん協同組合は、昭和53年から同63年の11年間に於いて、年々のように生産の規模を縮小して現在に及んでいる。

しかし生産規模の縮小は、内部的な構造変化を伴っていることが明らかである。すなわち、21～40台、141台～の小規模と大規模のグループが相対的な比重を低めており、逆に、41～60台、61～80台、81～100台、121～140台の中規模のグループが相対的な比重を高めている。つまり昭和63年の生産構造は、10年前と異なり、中規模の機業によって担われているということができよう。なぜ大規模の比重が低下したかは、大規模が半導体産業などに一部転換していることがその理由と考えられる。

つぎに全体としての生産高の減退は一体何に原因するものであろうか。以上の分析よりわかるように、春江ちりめん協同組合は小巾の生産割合が高く、生産品種は和装対象が主であるために、このような結果をもたらしたものといえる。つまり「和装不況⁽¹⁾」の影響を正面から受けたものといえよう。春江産地では広巾への転換が行なわれているものの、その進展度合は必ずしも捗々しくないように思われる。

参考文献及び注記

- (1) 和装不況とは何を指すか。それは国内の生糸の価格水準により、蚕糸業と絹業の発展が両者それぞれに規制されるということである。生糸の価格水準が高ければ蚕糸業は潤うが、絹業は国際的な糸価水準との関係で経営は困難である。正に trade off (一方がよければ他方が悪い) の関係にあるといえよう。生糸の価格水準は生糸の一元輸入などの蚕糸業の保護行政から、国際糸価水準に比べて高く、このため絹業界は慢性的な不況にさいなまれてきた。和装不況はこれを指す。

○ 神立春樹「明治期農村織物業の展開」東大出版会（昭和49年）

○ 齊藤与次兵衛「春江町史」福井県坂井郡春江町役場（昭和44年）

〈謝辞〉 実態調査に際し、心よく組合員台帳の貸出しなど、資料提供の便宜を賜った春江ちりめん協同組合理事長 坪内琢磨氏、また幹旋の労をとられた福井県絹織物工業協同組合専務理事 故 養輪信蔵氏（平成3年9月急逝）、また福井県織物統計の便宜を賜った福井県庁の皆さんに紙上をかりて謝意を表す。また本稿作成にあたり、本学経営工学科卒業研究生 八丁裕文（経営管理コース）、石井忠博・高田千幸（ともに経営情報コース）の諸君の協力を得た。記して謝意を表す。

（平成3年9月3日受理）